

《論文》

欧米における青いケシのイメージとチベット医学： 植物のイメージ人類学

長 岡 慶*

Western Images of the Blue Poppy and Tibetan Medicine: Anthropology of Images about Plants

Kei NAGAOKA

This study explores the relationship between the historical images of the blue poppy in the West and the recent industrialization of Tibetan medicine by focusing on image production. The blue poppy (*Meconopsis* species) is an alpine plant that grows wild around the Himalayas. Although previous studies discuss the industrialization of Tibetan medicine through the mass production and distribution of medicines in a transnational context, discussions on Tibetan and Himalayan plants are limited to their use as raw materials for medicines. Further studies are required about the historical meanings and values of these plants and their relationships with Tibetan medicine. Referring to the perspective of Hans Belting's "anthropology of images," this study focuses on producing images that interact with media and the body. I argue that the blue poppy has become a symbolic plant of the "science of healing" in the Tibetan medical industry, which is intertwined with its Western images. First, I discuss how Western botanists, horticulturalists, and lay people have produced images of blue poppies through various media between the 19th and early 20th centuries. Thereafter, I analyze how Tibetan medicine practitioners encounter these images and produce new images of the blue poppy in the industrialization of Tibetan medicine.

キーワード：チベット医学、植物、イメージ人類学、メディア、身体

Keywords: Tibetan medicine, plants, anthropology of images, media, the body

* 日本学術振興会特別研究員（CPD・東京大学）／カリフォルニア大学バークレー校客員研究員
keinagaoka@gmail.com

Received on 2023/4/14, accepted after peer reviews on 2023/7/21.

© 立命館大学アジア・日本研究所

『立命館アジア・日本研究学術年報』2023, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.4, pp.20-44.

1. はじめに

青いケシを初めて目にしたのは2008年8月、インド北部ロータンパスの山中であった。鮮やかな濃い青色の花を広げ、岩場のなかに青いケシが1本立っていた。霧に濡れながら花は雨傘のように下向きに咲き、私はしゃがみこんで何枚もその写真をとった。「これも薬になるよ」と、案内してくれたチベット医学を学ぶ現地の学生が言った。そのとき私は、チベット医学の専門大学が行う薬草実習の見学に訪れていた。教員と学生たちはテントを張って山で合宿し、インドに住むチベット人の学生や北部のラダックやザンスカールから来た学生、さらにネパールやモンゴルから来た留学生がいた。学生たちは、山でみつけた薬草を一つ一つ新聞紙に押し花にして手製の標本ノートをつくり、薬草の名前と特徴を覚えていた。まだスマートフォンが現地に普及する前の頃だったが、小さな携帯電話の画面で植物の写真を記録する学生もいた。教員はそれを見ながら「そのうちみんな携帯電話で記録するようになる。新聞標本の習慣はなくなってしまうだろうね」と語った。3日ほど学生たちと薬草散策をしたなかで、青いケシを見たのは一度だけであった。

本稿は、イメージの生成という視点から、欧米における青いケシのイメージとチベット医学の産業化との結びつきを明らかにするものである。青いケシ（ブルーポピー）は、チベット・ヒマラヤから中国西部の高山地帯に自生するケシ科メコノプシス属（*Meconopsis*）の植物で、20世紀前半に欧米の園芸界で流行し、「青いケシ」という愛称が広く知られるようになった。青いケシは、欧米で園芸植物としてその美しさを愛でる対象とされてきたのに対し、チベット医学においては薬用植物の一つとして心身の不調を治療する薬の原料とされてきた。本稿は、この青いケシをめぐる欧米とチベット文化圏の異なるイメージがいかにして出会い、チベット医学の産業化の過程で新たなイメージがつくられていったのかを論じる。

チベット医学とは、12世紀にチベットで成立した医典『ギュー・シ』（*rgyud bzhi*）¹と後代の注釈書、薬物書に基づく医療に関する知識と実践のことである。その後、チベットからインドヒマラヤ、ブータン、ネパール、モンゴル、シベリアの一部（ブリヤートやトゥバ）に広がり、それぞれの地域で発展した（Pordié ed., 2008）。チベット以外の地域でも広く実践されていることから、今日では、より一般的な「ソワリグパ（Sowa Rigpa）」という名称が、治療者や研究者のあいだで用いられるようになってきている（Adams et al. eds., 2010; Kloos, 2017）。ソワリグパ（*gso ba rig pa*）は、元々チベット語で「治療・養生の智慧」、あるいは仏教の5つの学問分野（五明）のうちの一つである「医学」を意味する用語であったが、20世紀後半にチベット医学の制度化や産業化が進むなかで「癒しの科学（science of healing）」という訳語がさかんに使われるようになった（Craig and Gerke, 2016）²。中国やインドにおいて、チベット医学は自国の医療システムの一つとして保護と支援の対象となっており、そのうちインドでは「ソワリグパ」が公式名として用いられ、工場生産された薬や健康美容品が「ソワリグパ製品」として流通している（長岡, 2021）。

これまでのチベット医学研究は、中国、インド、ネパール、モンゴル、ブリヤートといった各国

¹ チベット語の表記は、標準的な表記法であるワイリー方式（Wylie translation）に基づき、アルファベットのイタリック体を用いる。

² ソワリグパにおける「癒しの科学（science of healing）」という新たな訳語は、インドにおいてアーユルヴェーダが「生命の科学（science of life）」と訳されることを参考にしたものである。

ごとに異なるチベット医学の展開を論じてきた。とくに、アムチ (*am chi*) と呼ばれるチベット医学の治療者の組織化や医療行為の変化、教育や製薬に関する制度構築の取り組みが論じられており、生物医学 (biomedicine)³ が現地に普及するなかでチベット医学が単に衰退していくのではなく、むしろ国家や生物医学の基準に基づいて再構築されることで、文化的であると同時に科学的な正統知として強調され、その規模を拡大していることが明らかにされた (Adams et al. eds., 2010; Pordié ed., 2008)。さらに、2010 年代以降は、チベット医学の医薬品や健康美容製品のグローバルな流通状況が関心を集め、薬の大量生産や商品化についての議論が増加している (Blaikie, 2013, 2015; Gerke, 2019; Hofer, 2018; Kloos, 2017; Saxer, 2013)。

チベット医学やアジアで成長するほかの伝統医薬産業の状況に関して、人類学者ステファン・クルーズは、「医薬のアッサンブラージュ (pharmaceutical assemblage)」という概念を提唱している (Kloos, 2017)。アッサンブラージュは、フランス語で既存の立体的なものを寄せ集めて組み合わせ、新しいものをつくりだす技法のことを意味する⁴。人類学者アナ・ツィンによる「閉じていない集まり」(Tsing, 2015: 23) というアッサンブラージュの概念化を参照し、クルーズは、医薬のアッサンブラージュが「社会文化的、政治的、経済的、医学的な組織として、より永続的な安定をまだ得ていない、新しいもの、そうでなければまだ目に見えていないものの大きな全体像 (あるいは地図) を描くため」に有効な概念であると論じる (Kloos, 2017: 699)。クルーズは、この概念を通じ、薬草の供給や薬の生産と流通、知的所有権との関わりといった複数の事象に注目して、今まさに始まったばかりのチベット医学産業のトランスナショナルな展開をとらえるべきであるとする (Kloos, 2017)。

医薬のアッサンブラージュは、植物が薬になり販売されるまでの過程に関わる多様な人とモノの関係を論じるうえで重要である。しかし、クルーズの議論の射程は、アジアの新興産業としてのチベット医学像であり、製品や商品としての薬の流通が重視される。そのため、青いケシやそのほかのチベット・ヒマラヤの植物については、薬の原料としての側面に議論が限定され、その植物がもつ歴史的な意味や価値、あるいは産業化のなかでアムチたちが新たにつくりだそうとする意味や価値についての側面は十分にとらえられているとはいえない。本稿では、イメージの生成という視点を用いることによって、青いケシという植物に対してつくりだされる様々な意味や価値に焦点をあてる。医薬のアッサンブラージュについて、青いケシのイメージをめぐる欧米の科学や園芸とチベット医学との邂逅の歴史から論じることによって、チベット医学の産業化が薬の商品化に関する経済的現象であるというだけでなく、イメージの生成と変化をめぐる人とモノ、言葉 (あるいは情

³ 生物医学 (biomedicine/Biomedicine) は、欧米の専門医療、いわゆる現代医学または西洋近代医学に対する名称で、生物学的な知識や技術に基づく医療であることを強調するものである。医療人類学者のゲインズとハーン (1985) は、科学的医学 (scientific medicine) やコスモポリタン医学 (cosmopolitan medicine)、西洋医学 (Western medicine)、アロパティック医学 (allopathic medicine)、あるいは単に医学 (medicine) と呼ばれてきたものに対して、他の文化圏の専門医療と区別可能であり、それらの医療と同様に固有名詞として英語において大文字でも表記可能な生物医学という名称を提示した (Gaines and Hahn, 1982, 1985)。とくに欧米の専門医療のみを医学と呼ぶことの問題について、他の文化のヘルスケアシステムを「非医学的」で「民俗的」なもの、つまり効力のないものとして医学的知識ではなく信念に基づくシステムにすぎないとみなすことが批判されている。今日、生物医学という呼称は、医療人類学やその他の分野において有用な名称として用いられている (Gaines and Davis-Floyd, 2003)。

⁴ ポストモダン哲学や社会理論、科学技術社会論において、アッサンブラージュは部分の総和に還元できない全体性や単一の論理に還元できない複数性をとらえる新しい概念として議論されている (Kloos, 2017)。

報）のダイナミックな絡まり合いであることを明らかにする。

II. イメージ、メディア、身体の相互作用

イメージ論は、芸術や写真、映画に関する研究で主に論じられてきたテーマである。しかし、医療もまたイメージと密接な関係にあり、生物医学においては解剖図や人体図、レントゲン写真といった図像によって媒介されるイメージが診療の実践に欠かせない要素を担っている。チベット医学の歴史においても、知識や実践の伝達のための手段として絵画が古くから利用されてきた。17世紀にはダライ・ラマ政権下で医学理論を図像化した医学絵画が制作され、現在に至るまでアムチの教育に広く活用されている。

チベット医学研究において、イメージを中心に扱った議論はあまりないが、チベット医学産業に関する議論のなかでわずかに言及されている。マーティン・ザクサーは、中国において「審美的」「古代の叡智」としてのチベット医学のイメージが、薬効を高める仏教儀礼や薬のパッケージ、広告を通じて戦略的につくりだされているとし、専門組織や製薬会社が強調する「チベタンネス」（チベット性、チベットらしさ）⁵について、人類学者アルフレッド・ジェルによる「魅惑化のテクノロジー（technology of enchantment）」（Gell, 1992）という概念を用いて論じている（Saxer, 2013）。さらに、テレジア・ホファーやバルバラ・ゲルケは、工場生産されるチベット薬のパッケージに注目し、中国やインドでは仏教や自然に関わるイメージが強調されるのに対し、スイスでは医薬品としての科学的イメージが強調されると指摘し、国や地域によって異なるイメージが生み出されていることを明らかにしている（Hofer, 2018; Gerke, 2019）。

このようなイメージを生み出すという行為について、美術史家ハンス・ベルティンクは『イメージ人類学』（2014）において、イメージ、メディア、身体の相互作用に注目し論じている。ベルティンクは、イメージとは何かという問いに対し、「ある特定のメディアの産物としてだけでなく、われわれ自身の産物としてみなければならない」（p.6）とし、それまでの美学や美術史学のイメージ論が人間の精神性やまなざしを重視してきたのに対し、生きている身体それ自体がイメージの生成や受容、伝達に関わっているとする（ベルティンク, 2014）⁶。

ベルティンクによると、イメージには、身体を介した心的イメージ（心象）の産出とメディアを介した物的イメージ（物的な像）の制作の二重の歴史が存在し、両者は二元論的にとらえるべきではなく、「永遠にやむことのない相互作用」（p.10）のもとで理解する必要があるとされる。人工物や作品といったモノとしてのメディアは、イメージにとっての支持体であり、歴史からみるとイメージはノマド（遊牧民）のようにあるメディアから別のメディアを渡り歩き、「それぞれの歴史的な文化に従って様相を変え、その都度アクチュアルなメディアを期限付きの滞留地のように利用する」（p.51）。他方、人間の身体は、モノからもたらされるイメージ（物的イメージ）をそのまま受容す

⁵ チベタンネスは、チベット人が欧米との接触を通じて、欧米人の抱くチベットのイメージを自らに投影し、内面化することによって想像され、新たに構築される。チベット人が語ったり表現したりするアイデンティティや文化において強調されるチベタンネスは単一ではなく、地域や文脈によって違いがみられる（Klieger, 1992）。

⁶ 人類学者の箭内匡は、イメージについて「あらゆる X に対する現れ」（p.22）と定義し、X には人間や人間以外の生物、物、それらの集まりがあてはまるとする。箭内は、「脱イメージ化」、「再イメージ化」、「イメージ平面」という独自の概念を用いて、X の現れとしてのイメージの多層性やイメージが「様々な形に転生していくこと」（p.26）について論じている（箭内, 2018）。

るのではなく、そこからさらに異なるイメージ（心的イメージ、心象）を生み出し、知覚し、記憶する。その意味で身体は「生きたメディア」(p.8)であり、人間はイメージが生成する場所であると理解される。

つまり、ベルティンクは、しばしば同一視されるイメージとメディアとを区別し、イメージを歴史のなかでメディアや身体との相互関係を通じて顕在化し、絶えず変化するものとしてとらえるのである。さらに、イメージは「人間の知覚の産物以上のものであり、個人あるいは集団による象徴化の結果として生まれる」(p.24)とされる。ベルティンクは、この象徴化を「生気付与 (Animation) の行為」(p.26)と呼び、人間は、モノとしてのメディアや身体経験を通じてイメージに生気を吹き込み、イメージはあたかも生きて話しかけてくるかのように人間の現前にあらわれ、世界と身体をつなぐとする。したがって、人間は、イメージの支配者や所有者などではなく、絶えず変化するイメージに委ねられた存在であり、「われわれはイメージとともに生き、世界をイメージにおいて理解している」(p.24)とされる。

ベルティンクの『イメージ人類学』は、美学や美術史学がメディアの物的素材における技術やその歴史を主に論じてきたのに対して、イメージの生成や受容をめぐる実践行為に注目する人類学的なアプローチを提唱し、イメージ、メディア、身体の三項の相互関係のダイナミズムをとらえるものである。さらに、従来の精神や知覚のみを重視する主知主義的なイメージ論を批判し、メディアや身体における物質性や歴史性、社会性に位置づけてイメージを多角的に論じることが目指されている⁷。

本研究は、このベルティンクの議論を参照し、イメージの生成という視点から歴史に位置づけた青いケシをめぐるイメージとメディア、身体の相互作用に焦点をあてる。具体的には、標本や図譜、絵、写真といったメディアの変化に着目して、それらがどのように青いケシのイメージを媒介してきたのかを分析する。さらに、「生きたメディア」である人間の身体経験（記憶や感情）にも着目し、欧米の植物学者や種苗業者、園芸家、庶民、チベット医学のアムチといった人々がいかに青いケシのイメージの生成に関わっているのかを論じる。本稿では、まず、12世紀に成立したチベット医学の医典における青いケシの位置づけを述べる。次に、19世紀から20世紀初頭の欧米における青いケシの探査と導入、園芸の歴史をたどり、青いケシをめぐるイメージの生成と変化を論じる。その後、20世紀後半のチベット人のディアスポラ拡大における欧米の青いケシのイメージとアムチたちとの出会いを論じ、最後に現在のチベット医学の産業化と青いケシのイメージとの関わりを考察する。

III. チベット医学と青いケシ

1. チベット医学について

チベット医学の理論は、インドのアーユルヴェーダにおける病因論を基礎におき、そのほかギリシャ医学、中国医学、チベットやヒマラヤ、中央アジアの民間医療といった広範な要素を含んだものである。病気は、心身を動かす要素である3つのニェパ (*nyes pa*)、すなわちルン (*rlung*)、ティーパ (*mkhris pa*)、ベーケン (*bad kan*) のバランスが乱れた状態とされ、生薬を調合した薬

⁷ ベルティンクのイメージ論に対して、イメージの身体性を強調するものの、具体的な事例分析はまなごしの交換の議論にとどまり視覚中心主義の域を出ていないという批判がされている（仲間, 2016; 前川, 2016）。

の服用や灸、吸い玉療法といった外科的治療、食事療法、薬浴療法を通じて3つのニェパのバランスを調和させることによって病気の治療が行われる（Adams et al., 2010）⁸。

チベット医学の病理論や治療論は、仏教の世界観とも深く結びついている。例えば、ルン、ティーパ、ベーケンとの働きは、仏教における五大元素（世界の万物を構成する地、水、火、風、空の要素）に基づいて理解されており、ルンは風の要素と関わるエネルギーで呼吸や言語、筋肉、消化、血圧の働きを司る。ティーパは火の要素と関わるエネルギーで肝臓や胃腸、心臓、目や皮膚の働きを司り、ベーケンは、地と水の要素と関わるエネルギーで味覚や咀嚼の機能、全身の関節の働きを司る。残りの空の要素は、ルン、ティーパ、ベーケンが存在するための場を提供するとされる。これらのルン、ティーパ、ベーケンは、食事や行動、生活環境を通じて外部からの五大元素の影響をつねに受けて質や量が変化し、それによってバランスが乱れ病気となる（ワングェル, 1995; ドウンデン, 2001）⁹。

病気の治療は、アムチによって行われ、20世紀前半までは主に僧たちによって実践されていた。病気は（1）前世のカルマ（業）で生じた治療不可能な病気、（2）神霊によって生じ悪霊祓いなどの儀礼によって治療可能な病気、（3）今生での不適切な食事や行動によって生じ、投薬や施術、食事療法などで治療可能な病気、（4）治療を受けなくても自然に治る軽い病気の4つに区別される（ドウンデン, 2001; ブラッドリー, 2003）。このうち、かつての僧医としてのアムチは（2）と（3）の病気の両方に対応し投薬や施術、悪霊祓いの儀礼に従事していた。しかし、20世紀後半、チベット医学の制度化の進展で、大学といった専門機関で教育を受けた俗人のアムチが増加した。診療所に勤務する現在のアムチは、主に（2）ではなく（3）の病気に対応する専門医となり、投薬や施術を行う（長岡, 2021）¹⁰。

チベット医学の薬は、2000種以上の植物性や動物性、鉱物性の生薬を調合してつくられる。生薬を単体で用いることはほとんどなく、少なくとも3種、多いもので150種以上の生薬を調合して一つの薬がつけられる（Hofer, 2018; ブラッドリー, 2003）。薬の原料として最も多く用いられるのが植物性生薬であり、植物の根や茎、葉、樹皮、樹脂、果実、花、あるいは全草が調合される。あらゆる

⁸ ニェパは、心身を動かす生命のエネルギーのようなものであると同時に、病気の原因を生む要素であり、病気の治療に関わる要素でもあるため、幅広い意味を含んでいる。チベット医学に関する英語や日本語の概説書において、ニェパはしばしば「体液（humor）」と訳されるが、チベット医学の治療者や学者は、この訳語が四体液論に基づくギリシャ医学の概念を転用したものであり、ギリシャ医学とチベット医学の病因論は本来異なるものであるため訳語として適切ではないとする（ワングェル, 1995; Gerke, 2011）。ニェパの下位区分であるルン、ティーパ、ベーケンについても概説書で生化学用語に還元して訳されたりするが、それ以上の広い意味をもつため必ずしも適当であるとはいえない。チベット医学研究では、これらのチベット医学用語をそのまま用いることが慣例となっており、本稿もその立場を踏襲する。

⁹ ルン、ティーパ、ベーケンのバランスの乱れの長期的な要因は、人間の無明（煩惱）から生じる執着（貪、瞋、痴）であり、あらゆる病気の根本原因とされる。短期的な要因は、個々の不適切な食事や生活習慣、年齢や時節の変化、生活環境、神霊の影響などである。ルン、ティーパ、ベーケンのバランスが乱れると、7つの身体構成要素（摂取した食物の栄養成分、血液、筋肉、脂肪、骨、骨髓、生殖液）や3つの排泄機能（糞便、尿、汗）のバランスに乱れが生じていき、人間は病気の状態になるとされる（ドウンデン, 2001; ブラッドリー, 2003）。

¹⁰ 専門医としてのアムチは、生物医学の教育課程と同様、専門機関で6年間の専門教育課程と1年間の研修医期間、卒業試験の合格を経てはじめて公的な資格が得られる。そのほか、村のなかで個々の師弟関係によって知識や実践を継承する世襲のアムチもいる。しかし、世襲のアムチの多くは公的資格をもたないため、チベット医学の制度化の拡大とともに、社会的地位の低下や後継者不足、ローカルな知識と実践の衰退が指摘されている（Schrempf ed., 2007）。

る生薬は、味（甘味や辛味など）と性質（熱性や冷性など）によって細かく区別されており、個々の生薬の働きを組み合わせることで薬効をつくりだし、3つのニェパのバランスの乱れを調整して病気を治療する。かつては、個々の患者に応じてアムチが自ら煎じ薬をつくり処方していたが、インドや中国においてチベット医学の制度化と薬の工場生産が進み、機械製造が容易で長期保存が可能な丸薬が主流となった。病院の医薬品と同様に、チベット薬の多くがビニール包装やブリスターパック（PTP 包装）¹¹によって患者に処方されている（Saxer, 2013; Hofer, 2018; 長岡, 2021）。

2. 薬用植物としての青いケシ

本研究が着目する青いケシすなわちメコノプシス属植物は、全部で43の属をもつケシ科植物（約820種）のなかの一つのグループ（属）の総称である（Grey-Wilson, 1993; 富山, 2020）。メコノプシス属植物は全部で79種報告されており、その大半が標高4000m以上の高地に自生し、青い花だけでなく赤や黄、白、紫、ピンクの花を持つ種もある（Grey-Wilson, 1993, 2015）。一般に麻薬で知られるケシ属植物がヨーロッパからアジア、アフリカ南部に広く分布するのに対し、メコノプシス属植物はアジアの一部であるヒマラヤ山脈、チベット高原、中国西部に分布地域が限定され、麻薬成分はほとんど含まない¹²。寒冷で湿潤な気候に生育し、草本で、多年生、一年生、二年生のものがある。花卉が大きく葉や茎に毛や棘をもつものが多い（大場, 2006; 富山, 2020）。



図1 青いケシ
(出典：富山, 2020: 69)

¹¹ ブリスターパックは、台紙の上の商品をその形に合わせた透明な硬質プラスチックで覆う真空成型の包装のことであり、日用雑貨や電子機器、化粧品、医薬品、食品、玩具などさまざまな商品の小売包装に用いられている。PTP包装は、医薬品の錠剤やカプセルをブリスターパックしたもので、防湿性や保存性が高い。

¹² メコノプシスの由来は、ギリシャ語のメコン（*mecon*）とオプシス（*opsis*）で、メコンは「ケシ」、オプシスは「似ている」であり、「ケシに似たもの」という意味がある（大場, 2006: 14）。日本では、1990年に花博（国際園芸博覧会）が開催された際、青いケシの生花が展示されて話題になった（大場, 2006）。現在も高山植物のなかで人気のある花であり、旅行会社が青いケシを対象にした海外ツアーを扱うほか、大阪や兵庫、長野などの植物園や観光施設で栽培され、開花期に公開されている。

青いケシは、チベット医学において薬用植物として利用されてきた。チベット医学の生薬名ではウッペル (*aut pal*) やツェルゴン (*tsher sngon*)、ムクチュンデンユン (*smug chung 'den yon*) といい、ウッペルは花卉の色で4種に分かれ、ウッペル・ンゴンポ (青のウッペル)、ウッペル・カルポ (白のウッペル)、ウッペル・マルポ (赤のウッペル)、ウッペル・セルポ (黄のウッペル) という。ツェルゴンは青の花弁と棘をもつ2種、ムクチュンデンユンは紫の花弁をもつ2種が生薬として用いられる (Williamson and Young, 2009)。

薬用植物としての青いケシの特徴について、ドゥンツォ (2005) やデカン (2008) は次のように説明している。ウッペル4種は、甘味から渋味へ変化し、冷の性質をもつ。効能について、青のウッペル (グランディス種 *M. grandis* など) は、肺や肝臓の高温障害、炎症、肝炎、喉の痛み、高温障害に伴うニェパの蓄積、象皮病や咽頭炎を治療する。赤のウッペル (プニケア種 *M. punicea* など) と黄のウッペル (パニクラータ種 *M. paniculata* など) は、肺の熱、肝臓や胆嚢に伴う熱、喉の炎症、血液疾患に有用で、象皮病や暑い条件から生じる水の滞留を排出する効果がある。白のウッペルは記載がないが、ほかのウッペルと効能は類似したものであると考えられる。ツェルゴン2種 (アクレアタ種 *M. aculeata* やホリデュラ種 *M. horridula* など) は、苦味や冷と鋭の性質をもち、骨の熱を鎮め、骨折や頭蓋の傷やただれを治し、肋骨や上半身 (背中など) の激痛を和らげる。ムクチュンデンユン2種 (ヘンリキ種 *M. henrici* など) は、苦味や冷の性質をもち、骨折の治療や、骨や変形した海綿骨に伴う発熱をおさえる (Drungtso and Drungtso, 2005; Dekhang, 2008)。つまり、青いケシは、心身の熱を冷やす冷性の薬用植物に位置づけられており、肝臓や肺に作用し炎症などを冷やす生薬 (ウッペル) と、頭蓋骨を含め身体の骨に作用して骨折を治し炎症を冷やす生薬 (ツェルゴンとムクチュンデンユン) があるということがわかる。

これらの青いケシは、先述のように単体で治療に用いられるのではなく、ほかの生薬と組み合わせで様々な薬がつくられる。例えば、「アガル 35 薬」はアガル (和名ジンコウ、*Aquilaria agallocha*) を主成分に 35 種の生薬を調合した薬で、このなかにツェルゴンが含まれている。この薬は、呼吸を楽にして、血液中を流れるルンの過多から生じる非局所的な痛みや背中上部の痛みを緩和するとされる。「キュルラ 25 薬」はキュルラ (和名アンマロク、*Phyllanthus emblica*) を主成分に 25 種の生薬を調合した薬で、これにはウッペルが含まれる。この薬は、血液に関わる病気を治療し、血圧を下げ、月経の流れを整えるとされる (Gyatso and Hakim, 2010)。

3. 青いケシの位置づけ

青いケシは、チベット医学の歴史においてどのような位置づけにあったのであろうか。12 世紀に編纂された医典『ギュ・シ』には、最も重要とされる薬用植物が9種書かれており、「三果六草 (デブスム・サンポドゥク '*bras bu gsum bzang po drug*)」と呼ばれている。三果とはミロバラン (*Terminalia chebula*)、セイタカミロバラン (*Terminalia bellirica*)、アンマロク (*Phyllanthus emblica*) であり、六草とはナツメグ (*Myristica fragrans*)、ブラックカルダモン (*Amomum subulatum*)、グリーンカルダモン (*Elettaria cardamomum*)、クローブ (*Syzygium aromaticum*)、ベニバナ (*Carthamus tinctorius*)、セイヒチク (*Bambusa textilis*) である。とくにミロバランは甘露、つまり天上の神々の霊薬といわれ、あらゆる病気を癒すとされている。薬師如来は右手にミロバランの枝、左手にその薬壺をもっていることから、ミロバランは薬師如来の象徴とされており、多くのチベット医学の専門組織や製薬会社、個人開業の診療所がミロバランの実をロゴマークに使

用している。他方、青いケシはその三果六草に含まれておらず、数ある生薬の一つであるもののミロバランのような特別な位置にはおかれていない。

チベット医学の歴史における青いケシの位置づけは、17世紀の医学絵画からもみてとることができる。17世紀、ダライ・ラマ5世（1617–1682）の摂政サンギュー・ギャツォ（1653–1705）は、チベット医学の知識を後代に正確に伝えるため、大勢の絵師をチベットの首都ラサに呼び、自身の著した『ギュー・シ』の注釈書を基に医学絵画79点をつくらせた。この医学絵画は病気や治療の理論を図示したものである（Williamson and Young, 2009）。青いケシはそのなかの2点の絵画に描かれており、いずれもほかの数多くの薬用植物の絵と一緒に小さく並べられ、とくに強調はされていない。

このようにチベット医学の歴史において特別な生薬とは位置づけられていなかった青いケシは、20世紀後半になって急にチベット医学の概説書や薬物書、さらに専門組織や個人のアムチのホームページにその絵や写真がさかんに登場するようになった。現在では、チベット医学を代表する植物のように青いケシが強調される。なぜ、青いケシの位置づけは変化したのであろうか。これについて欧米の歴史との関わりから検討したい。



図2 チベット医学絵画に描かれた青いケシ（上から5段目の左から6つ目にウッペル4種の絵）

（出典：Hofer, 2018: 54）

IV. 植民地科学と青いケシ

1. ヒマラヤの植物探査：標本としての青いケシ

青いケシと欧米の人々との関わりは、19 世紀イギリスによるヒマラヤの植物探査にさかのぼる。青いケシは徐々に植物学者や園芸家、育種業者のあいだに知られていき、欧米のケシ科植物には存在しない青い花卉をもつ種として関心と呼んだ。ここからは、イギリスにおける青いケシの探査と導入の歴史に焦点をあて、いかなる青いケシのイメージが複数のメディアを媒介に生成されていたのかを明らかにする。

17 世紀以降、海外貿易や植民地支配が拡大するなかで、イギリスに外国の植物が数多くもたらされるようになった。都市部の上流階級を中心に外国植物の園芸が流行し、外国に出かけて珍しい植物を入手することを専門の職業とするプラントハンターや、その外来植物を自国で育種し園芸植物として栽培化する種苗業者が登場した（白幡, 2005）。この時代、イギリスにおいて庭づくりを意味する「ガーデニング (gardening)」という言葉のほかに、科学としての園芸すなわち「ホーティカルチャー (horticulture)」という言葉が新しく生まれた（飯田, 2016）¹³。18 世紀に学問としての植物学が成立すると、在来植物の薬効を調べる本草学者 (herbalist) に代わって植物学者 (botanist) が登場し、世界のあらゆる植物をみつけ分類し研究することがめざされるようになった（飯田, 2016; 中山, 2003）。植民地支配体制のもとで、外来植物は高値で取引される商品となり、植物学は外来植物を扱う園芸市場と密接に結びついていった。

19 世紀になると、東インド会社やキュー植物園、ロンドン園芸協会、種苗業者、園芸愛好家の貴族といったさまざまな組織や個人がパトロンとなってプラントハンターを雇い、さかんに外国の植物探査が行われるようになった（白幡, 2005; 川島, 1999）。そのなかで、ヒマラヤの植物探査は、19 世紀初頭ネパールにおいて最初に行われた。長く鎖国していたネパールはイギリス人の訪問を許可し、1802 年から 1803 年にフランシス・ブキャナン（のちのハミルトン卿, 1762–1829）、1820 年にナタニエル・ウォーリック（1786–1854）がネパールで植物調査を実施した（大場, 2006）。このとき、ウォーリックは採集人を標高 5000m 以上の高地に送り、初めてヒマラヤの高山植物の標本を得ることに成功した。そのなかに、のちにメコノプシス（青いケシ）と呼ばれることになる植物が含まれていた。東インド会社を通じて、ウォーリックのつくった標本（通称ウォーリック標本）のカタログが世界中の研究機関に配られ、ヒマラヤの植物研究が始まった。

スイスの植物学者オーギュスタン・ピラミュ・ドゥ・カンドール（1778–1841）は、ウォーリック標本を研究し、そのなかにあった高山植物の一種をメコノプシス属植物の新種であるとしてナパウレンシス種 (*M. napaulensis*) と名付け、1824 年『植物自然分類序説』の第一巻で発表した（Grey-Wilson, 2015）。メコノプシス属という名前自体は、1814 年にヨーロッパで自生する黄色い花ウエルシュ・ポピーに対してつけられた新しい属名で、当時はまだ独立の属として認めない学者もいた¹⁴。しかし、ドゥ・カンドールはこのメコノプシス属という新しいグループを認める立場をとり、ヒマラヤの新種植物にメコノプシスの一種として学名を与えたのである。当時、ドゥ・カンドールはリ

¹³ オックスフォード英語辞典において、ホーティカルチャーの定義は「花・果実・野菜の栽培を含め、庭の管理の技術または科学」である（飯田, 2016）。

¹⁴ 2000 年代に DNA 分析によってウエルシュ・ポピーは、ヒマラヤのメコノプシス属の種よりケシ属のヒナゲシに近縁であることがわかり、ケシ属の *Papaver cambricum* に変更された（Grey-Wilson, 2015; ラック, 2022）。

ンネの人為分類に代わって、自然分類という新たな植物分類体系を提唱していた¹⁵。彼が、ヒマーラヤのメコノプシスを発表した『植物自然分類序説』はその自然分類法に基づいて書かれた著作であり、その後、自然分類法は、ダーウィンの進化論に影響を与え、現在においては植物を進化の系統で分ける主要な分類方法となっている。つまり、ヒマーラヤのメコノプシスは、ヒマーラヤ植物探査の初期にもたらされたウォーリック標本と、ドゥ・カンドールの自然分類を通じて欧米の植物学界に登場し、新しい属名や分類法をめぐる論争のながで名づけられた植物であった。

2. 彩色図版の流通：植物図譜としての青いケシ

ネパールの植物探査に続いて、インドにおいても1830年代に西ヒマーラヤでカシミール植物探査、1840年代に東ヒマーラヤでシッキム植物探査が行われた。これらの植物標本から新たにヒマーラヤのメコノプシスが数種発表され、とくにシッキム植物探査を行ったジョセフ・ダルトン・フッカー(1817–1911)による標本には、その後欧米で青いケシの代表格の一つとして知られることになる濃い青色の花弁をもったホリデュラ種(*M. horridula*)も含まれていた(大場, 2006; Grey-Wilson, 2015)。

シッキム植物探査において、フッカーは4年間現地に滞在し、標本だけでなく多くの植物の種子をイギリスにもたらした¹⁶。帰国後の1855年に、彼は『ヒマーラヤ植物図譜』を刊行し、そのなかでメコノプシス2種(シンプリキフォリア種 *M. simplicifolia* とパニクラータ種 *M. paniculata*)の手彩色による植物図譜を発表した。植物標本では、植物が完全に乾燥した状態となっているため、生きていたときの花弁の色を知ることは難しい。当時の専門家たちは、標本ではなく彩色図譜を通じてはじめて、ヒマーラヤのメコノプシスが鮮やかな青色であるということを知ったのである。フッカーの彩色図譜は、キュー植物園からカタログとして印刷され、各地の植物園や種苗会社に配られた。ヒマーラヤのメコノプシスは植物学者や種苗業者の関心を集め始めた一方、欧米のケシ科植物にはみられない青い花のケシが本当に存在するのかと疑いをもつ人々もいた(大場, 2006)。やがて、専門家たちのあいだで青い花のメコノプシスは、ヒマーラヤの秘境に咲く幻の花あるいはミステリアスな花としてイメージされるようになった。

この時代、植物探査の後に彩色図譜がつくられた背景には、18世紀以降の印刷技術の発達や19世紀前半の郵便制度の確立が関わっている。産業革命によって彩色印刷や印刷物の大量生産が可能になり、イギリス園芸協会の『植物カタログ』(1730年)や植物画雑誌の『カーティス・ボタニカル・マガジン』(1787年)が刊行され、これまでになかった色彩豊かな美しい植物図譜が人気を博した。種苗業者たちも競い合うように彩色刷りの植物カタログを出版し、多くの彩色図譜が流通するようになったのである。さらに、1840年代に郵便制度が整備され、植物カタログの配布や注文が容易になった(ブラント, 2014; 飯田, 2016)。そのためフッカーの時代には、植物学界や園芸界に彩色図譜が多く出まわっており、彩色図譜を通じてメコノプシスの青色や秘境の幻の花としてのイメージが広まっていったのである。

¹⁵ 人為分類とは、生物を整理するために便宜上あらかじめ定めた属性を用いる分類方法で、例えばリンネによる植物の雄しべと雌しべの数の違いに基づいた性分類体系がある。それに対し、自然分類とはあらかじめ属性を定めず、生物の特徴全体をとらえ総合的な類似性にもとづいてなされる分類方法である(大場, 2006)。

¹⁶ サクラソウやシャクナゲは、このときフッカーがもたらした種子から園芸種がつくられ、欧米の園芸界に広まった(ラック, 2022)。

メコノプシスに対する関心が高まるなか、19世紀末に植物学者のデイヴィット・プレイン（1857–1944）が初めてメコノプシス属植物全体の研究を行った。プレインは、1896年の論文で、これまでに発表されたメコノプシスは23種であるとした。さらにその後、1900年代の中国西部の植物探査によって多くの新種メコノプシスの標本や種子がイギリスにもたらされたため、プレインはそれらを研究し、1915年の論文でメコノプシスの数を43種に改めた（大場, 2006; Grey-Wilson, 1993）¹⁷。

3. メコノプシスの流行：生きた花としての青いケシ

植物園や種苗業者は、プラントハンターたちがイギリスにもたらした種子を用いて、1850年代以降、メコノプシスの栽培を実験的に行っていた（Grey-Wilson, 1993）。しかし、まだ育種の技術は十分ではなく、発芽して生長する植物はわずかであり、大半の専門家にとって青い花を咲かせたメコノプシスの姿は植物図譜のなかでしか見ることでしかないものであった¹⁸。

しかし、1920年代後半、プラントハンターのフランク・キングドン＝ウォード（1885–1958）による植物探査が大きな転機をもたらすことになった。キングドン＝ウォードは、1924年から1925年にかけてチベット南東部のツァンポー峡谷を訪れ、そこで多くの新種植物をみつけ、濃い青色の花弁をもつ新種のメコノプシス、バイレイ種 *M.baileyi* の大量の種子をイギリスのエディンバラ植物園に送ることに成功した（キングドン＝ウォード, 1999）¹⁹。翌1926年、そのバイレイ種の種子はイギリスで青い花を咲かせ、王立園芸協会が主催するチェルシーフラワーショーで一般公開された²⁰。ヒマーラヤのメコノプシスの多くが標高4000m以上に自生するなかで、キングドン＝ウォードの見つけたバイレイ種は比較的標高の低い3000mから3600mに自生する種であったため、イギリス北部の冷涼な気候でうまく育つことができたのである。これによって初めて、鮮やかな青い花を咲かす生きたメコノプシスの姿が、専門家のみならず多くの一般の人々の目に触れることになり、イギリス園芸界に大きなセンセーションを巻き起こした（富山, 2020; ラック, 2022）。

やがて人工交配や育種の技術が発達し、イギリスで栽培可能なバイレイ種とメコノプシスのほかの種を人工交配させた園芸種がつくられ始めた。例えば、バイレイ種とグランディス種を交配したシェルドニイ種（*M.sheldonii*）や、バイレイ種とパニクラータ種を交配したアウリクラータ種（*M.auriculata*）などである。バイレイ種の性質をもったこれらの園芸種は、イギリスの冷涼な気候に適応し開花することができた。メコノプシスの園芸種は「ヒマーラヤの青いケシ」と呼ばれて流行し、高値でやりとりされ、イギリスのみならず欧米諸国の冷涼な地域を中心に広まった。

¹⁷ プラントハンターのジョージ・フォレスト（1873–1932）が中国西部を探査し、多くの標本と種子をもたらした（大場, 2006）。

¹⁸ 最初にイギリスで園芸に導入されたメコノプシスは、ランブ型の黄色い花弁をもつインテグリフォリア種（*M.integrifolia*）である。種苗業者ヴェッチ商会が1903年にプラントハンターを中国西部に派遣し、その種子を大量に収集して栽培化した（大場, 2006）。

¹⁹ バイレイ種は、その後ベトニキフォリア種（*M.betonicifolia*）に改められたが、2009年に再びバイレイ種に分類された（Grey-Wilson, 2015）。

²⁰ チェルシーフラワーショーは、英国王立園芸協会（The Royal Horticultural Society: RHS）が主催する権威ある園芸イベントであり、チェルシー王立病院の敷地で1913年から現在まで毎年5月に開催され、大勢の人が観覧に訪れる。



図3 『カーティス・ボタニカル・マガジン』(1927年)の青いケシの植物図譜
(出典：エドワーズ, 2022: 125)

ヒマラヤの植物探査を契機に、欧米の専門家たちのあいだで知られることになった青いケシは、長いあいだ標本や彩色図譜のなかでしかその姿を見ることができない存在であり、それが秘境の幻の花やミステリアスな花としてのイメージを生みだしていった。この青いケシをめぐる探査と導入の歴史は、イギリスの植民地科学のありかたと深く結びついたものであった。当時イギリスは、インドをはじめ各地の植民地に植物園をつくり、外国植物の探査と導入に力を入れていた。プラントハンターの採集した標本や種子は、現地の植物園を経由して本国イギリスの植物園に送られ、宗主国と植民地をつなぐ広大な植物園のネットワークのもと大量の外来植物がイギリスに集められていた(川島, 1999, 2020)。青いケシもまた、このネットワークを通じてイギリスの植物学や園芸の世界にもたらされたのである。植物学者は外来植物を分類して英語による名づけを行い、種苗業者はそれを育種して栽培可能な園芸種をつくりだすことで、それを「イギリスのもの」として海外に流通させ、イギリスに利益をもたらしたのである(シービンガー, 2007; 飯田, 2016; 中山, 2003)。植物学や園芸の実践は、帝国支配の重要な事業の一部であり、植民地科学のテクノロジーとしての標本や彩色図譜を媒介に、青いケシのイメージは生成され受容されていった。

V. 第一次世界大戦の記憶と青いケシ

1. 戦没兵士追悼の赤いケシ

イギリスで青いケシの生花が一般公開された1920年代は、第一次世界大戦(1914–1918)が終結して間もない頃である。植民地科学のなかで生成されてきた青いケシのイメージは、戦争を経験した当時の一般の人々のあいだで、ほかの植物のイメージと関わりながら変化した。ここでは、第一次世界大戦後における青いケシの流行の背景に焦点をあて、園芸植物としての青いケシのイメージ

の生成について、欧米の人々の身体経験との関わりから論じる。

青いケシがフラワーショーで一般公開される前、イギリスでは別の花がさかんに人々のあいだでやりとりされていた。それは、ケシ科ケシ属植物のヒナゲシ（*Papaver rhoeas*）である。第一次世界大戦で大勢の犠牲者がでたイギリスでは、大戦後、戦没兵士を追悼するための記念碑が数多く建設され、そこに赤い花のヒナゲシが献花された²¹。ヒナゲシはヨーロッパに自生する植物で、イギリス周辺の農村では麦畑によくみられる身近な植物であった。第一次世界大戦前の産業革命の時代、赤いヒナゲシは牧歌的な農村風景や過去への郷愁のイメージと結びつき、印象派絵画や文学にしばしば用いられていた（ラック, 2022）。

そのヒナゲシが戦没者追悼のイメージをもつことになった最初の契機は、第一次世界大戦中の1915年に匿名で発表された「フランダースの野に」という一編の詩である。それは、カナダの軍医ジョン・マクレイ（1872–1918）が激戦地となったフランダースの戦場で赤いケシ（ポピー）の咲き乱れる光景を目にし書いたものであった。

フランダースの野にポピーが揺らぐ
十字架の間に、何列も何列も、
ここがぼくたちの場所 空には
今でも元気な声で飛ぶひばり
かすかに聞こえる地上の砲声の中で

ぼくたちは死んだ 数日前には
生きていて、夜明けを感じ、輝く夕焼けを見た
愛して、愛された、それなのに今では
フランダースの野に横たわる

敵との争いを終わりにしよう
弱ってきた手でぼくたちはトーチを投げる
受け止めて高くかかげてくれないか
死んだぼくたちとの約束を守れないなら
ぼくたちは眠れない、ポピーの花が
フランダースの野に咲き誇っても

[小沢通二訳／『図書』2015年11月号所収／岩波書店]

このジョン・マクレイの詩は反響を呼び、赤いケシの挿絵とともに新聞や広告に印刷され、欧米で多くの人々に読まれた。アメリカの大学教授で、1917年のアメリカ参戦後はYMCAの職員としてボランティア活動をしていたモイナ・マイケル（1869–1944）は、第一次世界大戦の終結後、この

²¹ 現存する戦没記念碑の数は54000以上にのぼり、そのほとんどが1918年以降の10年間で建設されたものである（粟津, 2014）。

詩をもとにヒナゲシの赤い花を戦没兵士追悼のシンボルにすることを提唱した。彼女は、赤いケシの花を売り、その売り上げで帰還兵や戦没者遺族を支援する活動をはじめた（ラック, 2022）。彼女の働きかけによって、1920年にアメリカの在郷軍人会が赤いケシを同会のシンボルマークに採用すると、それに続いて、カナダやイギリス、オーストラリア、ニュージーランドの在郷軍人会も同様に赤いケシをシンボルマークにした。



図4 「フランダースの野に」の詩と赤いケシの挿絵（1921年）

（出典：ブリタニカ、2023年3月28日閲覧、<https://www.britannica.com/topic/In-Flanders-Fields>）

1920年代初頭、フランスで赤いケシの造花の大量生産がはじまり、退役軍人や戦没兵士の未亡人が工場に雇用され、生活支援が行われた。フランスで生産された造花はイギリスに輸出され、販売された²²。赤いケシの造花は、退役軍人や戦没者遺族に対する寄付の返礼として配られ、造花を胸に着けることが追悼と連帯を表明する行為となった。フランスに続き、イギリス国内においても在郷軍人会が赤いケシの造花工場を設立し、退役軍人を雇用して、造花の大量生産が行われた。

赤いケシの生花や造花は、募金活動のほかに、戦没記念碑や墓石への献花としても用いられた。戦中、イギリス連邦諸国は、戦場で亡くなった兵士の遺体の本国への送還を衛生上や経済上の観点から禁止していた。戦没兵士は戦場で埋葬され、個々の遺体ごとに木製の十字架がたてられ埋葬地が記録された。戦後、政府は、1920年代から1930年代にかけて多くの墓石や記念碑をイギリス国内に建設し、そこに戦没兵士の名を刻み追悼することを国家事業とした。墓石に名が刻まれた後、戦地にたてられていた木製の十字架はイギリスの遺族の元に送還され、遺族は、それを教会の敷地内につくられた戦没記念祠（ウォー・シュライン）の中に納めた（栗津, 2014）。休戦協定が締結された11月11日に最も近い日曜日が戦没者追悼記念日（リメンブランス・デー）となり、各地の墓石や戦没者記念碑、教会の戦没者記念祠で赤いケシの花束や花輪の献花が行われるようになった（栗津,

²² フランスでは、自国の身近な花で、軍服と同じ青紫色の花弁をもつヤグルマギクが戦没者追悼の花とされた。

2014)。赤いケシの募金活動も同じ11月に行われ、戦没者追悼記念日は「ケシの日」（ポピー・デー）、赤い花のヒナゲシは「追悼のケシ」（リメンブランス・ポピー）とも呼ばれるようになった。

それまで麦畑やノスタルジーのイメージと結びついていた赤いケシは、第一次世界大戦を契機に、詩や絵、造花、献花を通じて「戦地に咲いた赤い花」として戦没兵士追悼のイメージをもつことになった。戦争の記憶をもつ人々が赤いヒナゲシを通じた社会活動をさかんに行っていた最中に、同じケシ科のヒマーラヤのメコノプシスは公開されたのである。人々が衝撃を受けたのは、その植物が単に珍しかったからというだけではないだろう。それは花卉の色以外はヒナゲシとよく似ていた。このメコノプシスの姿は、戦争を経験した人々にとって赤いケシのイメージと重なり、特別な感情を喚起した。19世紀に植物学者がメコノプシスと名付けた植物は、第一次世界大戦の経験を背景にヨーロッパの赤いケシ（レッド・ポピー）に対するヒマーラヤの青いケシ（ブルー・ポピー）として愛称がつけられ、親しまれていったのである。

2. イングリッシュ・ガーデンを彩る花

さらに、青いケシの流行の背景には、第一次世界大戦前後における園芸の変革も深く関係している。イギリスにおいて園芸は19世紀後半に大衆化し、大きな庭園をもつ上流階級だけでなく、中産階級の人々も珍しい外来植物を小型の温室や鉢植え、花壇を用いて育てるようになり、園芸は市民の趣味や娯楽となった。ロンドン園芸協会は各地でフラワーショーを開催し、園芸を国民文化として啓蒙する活動に力を入れた。大衆向けの園芸雑誌も数多く刊行されるようになり、趣味としての園芸（ガーデニング）が見直され、都市労働者の福利厚生においても園芸が推奨された。政府にとって園芸は、対外的には植民地支配の技術の一つであったが、国内に対しては、隣国で起きていた民衆の暴動や革命を抑制し、植民地の拡大で拡散しつつあったイギリス国民のナショナル・アイデンティティを醸成して結束を強める手段の一つとして重視された（飯田, 2016）。

園芸の変革は、19世紀末に園芸家たちによってはじまり、産業化に対する反発から産業化以前の「古き良きイングランド」を反映した自然回帰を志向する庭が提唱された。特に大きな影響を与えたのは、ウィリアム・ロビンソン（1838–1935）の「野生の庭」とガートルード・ジーキル（1843–1932）の「色彩の庭」であった。1870年代にロビンソンが提唱した「野生の庭」は、それまでの莫大な費用と労力を投じた豪勢な庭を批判し、イギリスの冷涼な気候に合わない非耐寒性植物（例えばアフリカの熱帯植物など）を庭に詰め込むのではなく、在来植物とイギリスの気候に合った耐寒性の外来植物だけを用い、手をかけず自然に育つ場所にそれらを植えて庭をつくるべきであるとした（Robinson, 1977 [1894]）。彼は、外来植物が大量にもたらされる前の古い時代の庭や田園のコテージ・ガーデンを理想としたが、外来植物をすべて排除するというのではなく、イギリスの環境に適した耐寒植物であれば積極的に利用した（石倉, 2008; 飯田, 2016）。

さらに、1880年代にはガートルード・ジーキルが「色彩の庭」を提唱した。彼女もロビンソンと同様に産業化における派手で商業主義的な庭を批判し、激しいコントラストによって豪華に見せようとするのではなく、画家が絵を描くように色彩やグラデーションに配慮して庭をつくるべきであると主張した（Jekyll, 1995 [1908]）。彼女もまた、産業化以前の「古き良きイングランド」への回帰を志向し、在来植物を尊重しつつ外来の耐寒性植物も利用して、さまざまな庭のデザインを手がけた。とくに、彼女が建築家エドウィン・ラッチェンス（1869–1944）と協力して1891年に設計したマンステッド・ウッドの庭園は人々の関心を集め、新たな庭の手本となった（宮前, 1999）。

第一次世界大戦後、イギリスで園芸ブームが起こるなか、ロビンソンやジーキルの提示した「イギリスの庭」すなわちイングリッシュ・ガーデンは理想の庭として人々に広まった。大戦中に中断していたフラワーショーが再開されたほか、個人が自宅の庭を公開するオープン・ガーデンも始まり、人々にとって、園芸に親しむ穏やかな生活が平和と豊かさのアイコンとなった（飯田, 2016）。そのなかで、新たにもたらされたヒマラヤの青いケシは、このイングリッシュ・ガーデンに植える花として必要な条件を満たすものであった。それは、ロビンソンが重視した耐寒性植物であり、イギリスの冷涼な気候での栽培に適していた。さらに、ジーキルが重視した色彩効果やグラデーションにおいても、青いケシの花弁は鮮やかで、淡い色や濃い色などバリエーションがあり、絵画のように庭を彩る色の要素として重宝された。外来植物であったにもかかわらず、青いケシは、園芸ブームのなかで「古き良きイングランド」を志向するイングリッシュ・ガーデンの理想の園芸植物の一つとして受け入れられ、庭を飾る美しい花のイメージが生まれていったのである。植物学者のグレイ・ウィルソンはケシ科植物のモノグラフのなかで、青いケシについて次のように述べている。

ケシ科の様々な植物の中で、有名な青いケシほど興奮と興味をそそる植物はないだろう。青い花を咲かせる植物は、ケシ科の他の属にはなく、それだけで長い間、園芸家の心を奪ってきたのである。（Grey-Wilson, 1993: 148）

青いケシは、ウィルソンが言うように、ほかのケシ科植物にはない青い色の花として多くの人々を魅了した。しかし、青いケシの流行の背景には、そのようなケシ科の種としての珍しさだけでなく、当時の欧米の人々の第一次世界大戦の記憶や感情といった身体経験や園芸の変革も深く関わっていた。植民地科学における青いケシのミステリアスな花のイメージは、第一次世界大戦後に変化し、詩や絵、造花、献花を媒介にした赤いヒナゲシの追悼のイメージと重なることで、珍しい花でありながらもどこか親しみの感情を抱かせる特別な花となっていたのである。さらに、園芸の変革期のなかで、青いケシの耐寒性や色彩が重要な意味や価値をもつようになり、自然回帰や平和志向、ナショナリズムと結びつきながら、イングリッシュ・ガーデンを彩る審美的な花としてのイメージが広まった。

VI. 癒しの科学と青いケシ

1. ニューエイジ運動とチベット医学の出会い

欧米において青いケシのイメージは、植民地科学の展開や第一次世界大戦の経験のなかで、様々なメディアや身体経験のあいだを移動しながら変化していった。欧米、とりわけイギリスにおいて青いケシは多くの園芸品種がつくられ、審美的な花のイメージとともに高い価格で流通し、さらに園芸以外にも青いケシの絵をモチーフにした食器や装飾品、日用雑貨といった商品が売られるようになった。20世紀後半、チベット人のディアスポラ拡大を背景に、チベット医学のアムチたちはこの欧米における青いケシのイメージと初めて出会うこととなったのである。ここからは、チベットからインドや欧米諸国に亡命したアムチ（以下、亡命アムチ）たちの活動に焦点をあて、絵や写真といったメディアを通じた、亡命アムチたちによる新たな青いケシのイメージの生成について論じる。

1950年代の中国によるチベット併合を背景に、ダライ・ラマ14世をはじめ多くのチベット人がイ

インドへ亡命した。インド北部のダラムサラ（ヒマーチャル・プラデーシュ州）にチベット亡命政府が樹立され、国内各地にチベット難民居住区が形成された。ダライ・ラマ 14 世の主治医であったイエシェー・ドゥンデン（僧医）は、インド亡命後、ダライ・ラマの指示のもと 1961 年にダラムサラにチベット医学組織（のちのメンツィカン）を設立した。チベット難民の診療や次世代のアムチの育成がインドの地で行われ、やがて亡命アムチたちが続々とメンツィカンに集まり、チベット医学の復興が模索された（長岡, 2021）²³。

1970 年代から 1980 年代にかけて、欧米でニューエイジ運動²⁴がさかんになるなか、インドの亡命アムチは欧米の人々と接点をもつようになった。ニューエイジ運動を背景にした「東洋ブーム」で、インドやチベットの精神性やスピリチュアリティ（霊性）に関心を持つ欧米の旅行者や研究者が数多くダラムサラを訪れるようになり、亡命アムチたちは診療所にやってくる欧米の人々に対してチベット医学を説明することが求められ始めたのである。そのなかで 1986 年、メンツィカンを設立したイエシェー・ドゥンデンがチベット医学を解説し、それをアメリカ人の仏教学者が英語に翻訳した概説書『バランスを通じた健康：チベット医学入門（*Health Through Balance: An Introduction to Tibetan Medicine*）』が刊行された（Donden, 1986）。欧米向けにわかりやすくチベット医学の基本を説明したこの本は反響を呼び、欧米圏でチベット医学に対する関心が高まるきっかけの一つとなった。

1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて、欧米の学者や作家、ジャーナリストによってチベット医学に関する英語の書籍が次々に出版された。しかし、その多くはニューエイジ運動の影響を受け、チベット医学と仏教の関係について、精神性や霊性（スピリチュアリティ）の視点からとらえようとするものに偏重していた。チベット医学は「仏教医学」や「チベットの精神性・霊性」と称され、神秘的なイメージがしばしば強調された（Clifford, 1984; Dummer, 1988）。しかし、実際のチベット医学は、先述のように、仏教だけでなく、アーユルヴェーダやギリシャ医学、中国医学、チベットやヒマラヤ、中央アジアの民間医療といった多様な要素を含んだものであり、仏教医学に限定されるものではない（Adams et al., 2010）。さらに、チベット医学には内臓や血液、骨といった身体部位に関する生理機能や外科的治療に関しても多くの知識や実践があるため、精神性や霊性だけにとどまる医療でもない（Sabernig, 2019）。しかし、ニューエイジ運動や「東洋ブーム」が広がるなかで、欧米においてチベット医学は、自分たちの文化にはない「東洋（非西洋）」の精神性や霊性を体現するものの一つとして受容された。仏教医学やチベットの霊性というイメージは、アムチとは無関係のところで商業主義と結びつき、チベットヨガ（チベット体操）やシンギングボール、観音菩薩や薬師如来の経を用いたヒーリング・ミュージック²⁵などが商品化され、欧米の人々のあいだで

²³ インドにおけるチベット医学の制度化の詳細は長岡（2021）を参照。

²⁴ ニューエイジ運動とは、宇宙や生命という大きな存在と自己とのつながりや、人間のもつ無限の潜在能力を強調し、個人の霊性・精神性を向上させることを目指す思想・実践に基づく運動である。1960 年代アメリカで既存の価値や体制を否定する対抗文化（カウンターカルチャー）が盛りあがるなか、東洋思想やスピリチュアリティ（霊性）、神秘主義に対する関心が高まり、1970 年代に広がった（Heelas, 1996）。ニューエイジは、近代合理主義でもなく宗教でもない第三の道を示そうとするものであり、日本では精神世界と呼ばれることが多い。自己の内面の探求や自己実現、自己変容に主な関心をもつ点で個人主義的であり、東洋思想のほか、アブラハム・マズローやカール・ロジャーズらによるヒューマニスティック心理学（人間性心理学）の影響のもと、科学的な認識と霊性の深化は一致するものであることが主張される（Heelas, 1992; 伊藤, 2004; 島藺, 1996）。その活動の大半は、特定の組織に対する強い帰属意識ではなく、本や雑誌、インターネット、セミナー、ワークショップを通じたゆるやかなネットワークによって支えられている（藤本, 2007; Heelas, 1996）。

²⁵ ヒーリング・ミュージックとは、心身の疲れを癒し、気持ちをリラックスさせたり、心地よい眠りをもたらしたり

消費された。

2. チベット医学の科学性

1990年代になると、インドやネパールのチベット難民居住区からアメリカ、カナダ、スイス、イギリスといった欧米の国々へ再移住するチベット人が増加し、メンツィカンの亡命アムチのなかにも、欧米の都市へ移住し自身の診療所を開設する者が現れはじめた²⁶。欧米の新天地で医療行為をすることとなった亡命アムチたちは、チベット医学が科学性をもった医療であることを示すため様々な普及活動をするようになった。

メンツィカンで教育を受けたタムディン・シザー・ブラッドリー（以下タムディン）²⁷は、1990年にインドからロンドンへ移住し、イギリス最初のアムチとなったチベット人女性である。タムディンは、診療所で医療活動をする傍ら、講演や新聞、雑誌を通じてチベット医学の普及活動を精力的に行い、2000年にチベット医学の概説書を英語で刊行した。それまでのチベット医学に関する英語書籍は、表紙に仏教や霊性イメージを強調する図や絵が多く用いられていた。それに対して、タムディンの概説書では、表紙全面に青いケシのカラー刷りの絵がはじめて用いられた。その解説内容も、仏教医学やチベットの霊性の強調ではなく、生物医学や科学の概念を交えて医典『ギュー・シ』の基本的な知識を紹介するものであり、さらにタムディン自身が実際にロンドンで診療した欧米の患者の症例や、健康のための具体的なアドバイスも書かれた実用的なものであった。

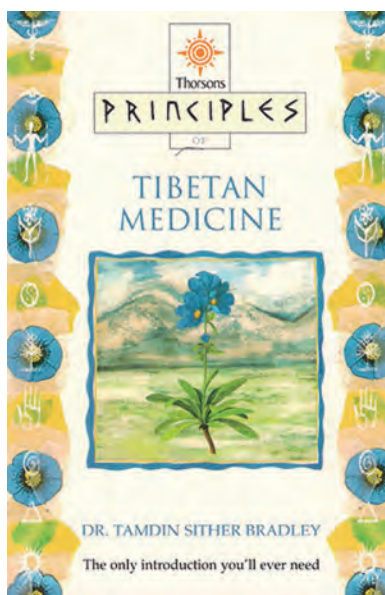


図5 タムディンの解説書の表紙
における青いケシ
(出典：Bradley, 2000)

するために作られた音楽のことをいう。

²⁶ 世界の亡命チベット人の人口は12万8000人以上で、30カ国以上の国々に分散し生活している。チベットに隣接するインド（94,203人）とネパール（13,514人）の次に人口が多いのはアメリカ合衆国（9,135人）であり、次にスイス（2,830人）、カナダ（1,977人）、ブータン（1,298人）、ベルギー（863人）、オーストラリア（509人）、イギリス（501人）、フランス（486人）、台湾（376人）、ドイツ（299人）、日本（176人）が続く（Planning Commission, CTA, 2010: 60）。亡命チベット人の人口は現在も増え続けている。

²⁷ 英語の姓は、欧米人である夫に由来する。

1960年代に南インドで生まれたチベット難民2世のタムディンは、インドのチベット難民学校で英語や科学の教育を受け、メンツィカンという専門機関でチベット医学を学んだ、いわゆる新しい世代のアムチの一人である。彼女は、概説書の第2章で「ソワリグパ：癒しの科学」と題し、いかにチベット医学が科学的にみても正統な知であるかを論証している。ロンドンの病院で彼女が行ったチベット薬の臨床試験の結果や、ハーヴァード大学やカリフォルニア大学の研究者による瞑想の効果に関する科学的な研究について言及されたあと、チベット医学がとくに（欧米で増加する）慢性病に対して効果的な医療であることが明示される。そのうえで、彼女は「チベット医学の知識は単にチベット人のためだけにとどまらず広く世界の他の人々のためにもある」（ブラッドリー, 2003: 19）と主張する。さらに、チベット医学とアロパシー医学（生物医学）は対立するものではなく、アムチは生物医学から多大な学びを得ることができ、生物医学の医師もまた同様にチベット医学を学ぶことによってそのよい点を吸収することができるとして「両医学はともに苦痛の癒しと除去という同じ目的を持っている」（ブラッドリー, 2003: 19）とする。このように、タムディンの概説書は、チベット医学が科学的な普遍医療であることを、主に欧米の人々に向けて発信するために書かれたものであり、現地で仏教医学やチベットの霊性とは異なるイメージをもつ青いケシの絵が表紙に用いられたのである。

このタムディンの概説書は、先述の1980年代に刊行されたイエシエー・ダウンデンによる概説書とも大きな違いがみられる。例えば、イエシエー・ダウンデンの概説書では、身体、診断、治療の順に章立てがなされ、それぞれのルン、ティーパ、ベーケンや五元素の理論に基づく詳しい説明のあとで、最後に質疑応答というかたちで欧米の人々にとって身近な疾病に関する補足説明がつけられている。これに対して、タムディンの概説書では、ルン、ティーパ、ベーケンの基本理論の説明のあとに、生物医学の枠組みにそって胎生学や解剖学、生理学、一般的な病気（風邪、心臓病、関節炎、呼吸器系疾患、糖尿病、中毒、小児病、婦人科病）、診断、治療、症例の順に章の項目がつくられ説明される。治療方法に関しても、イエシエー・ダウンデンの解説では生活態度や食生活の改善が中心であるのに対し、タムディンの解説では、欧米読者が実際に患者としてアムチの医療行為を受けることが想定されており、食生活以外にアムチが診療で利用する薬の内容や投薬方法、吸い玉療法や鍼灸といった施術に関して具体的に説明されている²⁸。

イギリスに渡って現地の人々を相手に医療活動することになったタムディンにとって、チベット医学が科学的な知識であり、誰にでも有用な医療行為であることを示すことは重要なことであった。一般に、本の表紙は、本のメッセージや内容を反映したものであると同時に、読んでもらうためにそれを見た人が興味をそそられ手に取るようなものであることが望ましい。イギリスで青いケシの審美的な花としてのイメージと遭遇したタムディンは、自身の概説書の表紙にそれまでチベット医学の歴史のなかで特別視されてこなかった青いケシの花の絵を用いた。青いケシの絵を通じて、彼女は仏教医学や霊性のイメージに代わる、チベット医学の科学性をめぐる新たなイメージを欧米の人々に向けて提示したのである。

²⁸ イエシエー・ダウンデンも2000年に2冊目の概説本を出した。前作と同様、彼のチベット語による解説が英訳されたものであるが、タイトルに新たに「科学」という言葉が用いられている（Dhonden, 2000）。前作の表紙ではチベット仏教の僧衣をまとった本人が患者の脈診をしている写真が用いられたが、2冊目では僧衣ではなく白衣を着た本人が経典を読んでいる写真が表紙となっており、チベット医学の仏教性と科学性の両方が強調されている。

3. 癒しの科学を象徴する青いケシ

インドにおいても、メンツィカンは、欧米諸国に積極的にアムチを派遣し、講演活動やメディカルキャンプと呼ばれる出張医療の活動をするようになっていった。2000年代、インド国内でチベット医学の制度化が本格化するなかで、亡命アムチたちはチベット医学の科学性をインド政府や国内外の学者、医療者たちに示すため、英語による概説書や薬物書を自ら刊行し始め、それらに青いケシのカラー写真が用いられるようになった。

最初にメンツィカンの出版物に青いケシが用いられたのは、2008年刊行の『薬用植物ハンドブック』（Dekhang, 2008）においてである。その表紙には7枚の薬用植物の部分的なカラー写真が並べられているのに対し、裏表紙にはダライ・ラマ14世の言葉として「本書が薬用植物とその病氣治療への利用に関心をもつ学生、研究者、学者、医療関係者にとって貴重な資料となることは間違いないであろう」という文章が付され、その下に青いケシの全体のカラー写真が用いられた。このハンドブックは、メンツィカンがほかのチベット医学組織とともに、インド政府に対してチベット医学の法的な承認を得るため制度構築に尽力していた時期につくられたものであり、200種以上もの薬用植物がチベット名だけでなく学名や英名、ヒンディー名を併記したかたちで掲載され、植物の特徴や効能が植物学や生物医学の概念も用いながら説明されている。

ハンドブックの著者であるツェリン・ドルジ・デカン（チベット人男性）もまた、先述のタムディンと同様、インドで英語や科学の教育を受けた新しい世代のアムチである。彼は、ハンドブックを通じて、チベット医学の理論に基づいた薬草知識を科学の形式や概念に翻訳し、チベット医学の科学性を強調している。他方で、ハンドブックの一部のページには、ダライ・ラマ6世の詩や有名な高僧の格言、チベットの古い民謡の歌詞といった文化に関わる要素も補足しており、チベット医学が科学と文化の要素の両方をもちあわせているということも示されている。青いケシのページでは、彼の兄からの助言という断り書きとともに、「庭師にちやはやされる庭の花のようになってはならない。野に堂々とたたずむ山の青いケシのようになりなさい」（Dekhang, 2008: 115）という言葉が添えられ、著者自身の記憶との関わりから特別な花のイメージが強調されている。

2010年、チベット医学はインドで正当な医療システムとして承認され、支援の対象となった。政府から資金援助を得るようになったメンツィカンは、チベット医学のさらなる普及活動とチベット薬の産業化に取り組み始めた。英語の薬物書『無数の薬草の百科事典：チベット医学の伝統における薬草』全2巻（Norbu, 2015）や薬草栽培書『絶滅危惧種の薬用植物の栽培と保護：健康のためのチベット薬用植物』（Kalsang, 2016）が新たに刊行され、その表紙に青いケシのカラー写真が大々的に用いられた²⁹。このように、チベット医学の制度化や産業化の過程で、青いケシはインドにおいてもチベット医学の癒しの科学を象徴する植物として重要な位置を占めるようになった。さらに、先述の薬草栽培書は、メンツィカンが環境保護と医薬産業の両立を模索するなかで始めた薬草栽培事業の成果をまとめたものであり、WWF（世界自然保護基金、2000年）とTRAFFICインド（商取引における動植物の取引記録分析、2000年）のガイドラインに基づいた正統なものであることが明示されている。その表紙を飾る青いケシのイメージは、普遍医療としての癒しの科学だけでなく、生物多様性保護をめぐるチベット医学の新たな知をも象徴するものとしてつくりだされつつある。

²⁹ 薬物書は、第1巻の表紙に青いリンドウの花、第2巻の表紙に青いケシの花の写真が用いられた。



図6 メンツィカンの薬物書第2巻の表紙における青いケシ
(出典：Norbu, 2015)



図7 メンツィカンの薬草栽培書の表紙における青いケシ
(出典：Kalsang, 2016)

20世紀後半以降、チベット医学の制度化や産業化のなかで、亡命アムチは欧米における青いケシのイメージと出会い、世界に有用な癒しの科学を象徴する青いケシのイメージを新たに生み出していった。しかし、なぜ、チベット医学において最も重要な植物とされてきたミロバランは、この癒しの科学の象徴とならなかったのであろうか。チベット医学の制度化において、亡命アムチたちはチベット医学がアーユルヴェーダの単なる派生医療やローカルな民間医療にすぎないのではなく、仏教と科学の要素を含んだ独自の正統な医療システムであることを政府や専門家に示すことを課題としていた。ミロバランは、チベット医学だけでなく、アーユルヴェーダにおいても最も重要な生薬であり、そのうえインド原産の熱帯植物である。亡命アムチたちは、アーユルヴェーダと差異化をはかるため、ミロバランに代わるチベット・ヒマラヤ固有の薬用植物を癒しの科学の象徴とすることを必要とした。青いケシは、まさにそのようなチベット・ヒマラヤの高山植物であり、同時に、欧米において審美的な花として特別なイメージをもつ植物であった。さらに、その花の青色は、チベット仏教徒にとって薬師如来の身体の色である瑠璃色を想起させるものでもあった。青いケシは、癒しをめぐる科学性と仏教性の両方のイメージを媒介する植物として適任だったのである。チベット医学における新たな青いケシのイメージは、欧米とのつながりのなかで生み出された。現在においては活字メディアに使われる絵や写真だけでなく、インターネット上のオンライン記事やホームページ、SNSを通じて、デジタル画像を媒介に癒しの科学としての青いケシのイメージが生成され続けている。

VII. おわりに

本稿は、イメージの生成という視点から、欧米の植民地科学や園芸における青いケシのイメージとチベット医学の産業化との結びつきを明らかにした。ベルティンクは、『イメージ人類学』におい

て、歴史からみるとイメージは複数のメディアや身体の相互作用を通じて生み出され、それらのあいだを移動しながら絶えず変化するとした（ベルティンク, 2014）。彼は、「イメージにとっては変化こそが唯一の連続性であり、イメージを変化させることだけが人間に可能な自由である。イメージはしたがって、疑問の余地のないほどに、人間の本質がいかに変化するものであるかを示している」（p.24-25）と述べている。青いケシのイメージは、ヒマラヤの植物探査からチベット医学の産業化までの歴史のなかで、多様なメディアや身体経験と相互に作用しながら絶えず生み出されてきた。欧米の植民地科学の文脈においては、標本から彩色図譜、生きた植物へとメディアが変化するなかで、ヒマラヤの秘境に咲く幻の花やミステリアスな花のイメージが生み出されていった。第一次世界大戦後の文脈においては、赤いヒナゲシにおける追悼の花のイメージや園芸の変革における自然回帰、平和志向、ナショナリズムといった戦争をめぐる身体記憶や感情、思想がメディアとなつて、イングリッシュ・ガーデンを彩る審美的な花のイメージが生み出され、園芸植物としての青いケシの市場価値を高めていった。20世紀後半、このような欧米における青いケシのイメージと遭遇した亡命アムチたちは、チベット医学の制度化や産業化の過程で、概説書や薬物書の挿絵や写真をメディアとし、世界に有用な癒しの科学を象徴するチベット医学の植物として青いケシのイメージを新たに作りだしていったのである。

本稿は、ベルティンクの人類学的アプローチによるイメージ論を参照することによって、従来のチベット医学研究において十分にとらえられていなかった欧米の科学や園芸とチベット医学との関係を明らかにした。イメージの生成という視点は、チベット医学産業における医薬のアッサンブラージュとそこで作りだされる植物の意味や価値について、トランスナショナルな歴史の視点や身体経験との関わりからとらえるうえで有効である。イメージ、メディア、身体相互関係は、芸術や医療、情報に関する今日の議論において重要なものであり、ヴァーチャル空間を流通するデジタルメディアとイメージの生成との関わりについても、今後さらに考えていく必要がある。

※本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金（20J00336）の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- 栗津賢太（2014）「追悼の多文化主義とナショナリズム：イギリスの事例を中心に」『宗教法』26, 53-78頁。
 飯田操（2016）『ガーデニングとイギリス人：「園芸大国」はいかにしてつくられたか』大修館書店。
 石倉和佳（2008）「ワイルド・ガーデンの思想：イギリス文化史の視点から」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』10, 121-129頁。
 伊藤雅之（2004）「新しいスピリチュアリティ文化の生成と発展」『スピリチュアリティの社会学：現代世界の宗教性の探求』（伊藤雅之・榎尾直樹・弓山達也編）世界思想社, 22-33頁。
 エドワーズ, アンバー（2022）『プラント・ハンティングの歴史百科：44の植物の発祥と伝搬の物語』（美修かおり訳）原書房。
 大場秀章（2006）『ヒマラヤの青いケシ』山と溪谷社。
 川島昭夫（1999）『植物と市民の文化』山川出版社。
 ———（2020）『植物園の世紀：イギリス帝国の植物政策』共和国。
 キングドン＝ウォード, フランク（1999）『植物巡礼：プラント・ハンターの回想』（塚谷裕一訳）岩波書店。
 シービンガー, ロンダ（2007）『植物と帝国：抹殺された中絶薬とジェンダー』（小川眞里子・弓削尚子訳）工作舎。
 島蘭進（1996）『精神世界のゆくえ：現代世界と新霊性運動』東京堂出版。
 白幡洋三郎（2005）『プラントハンター』講談社。
 ドウンデン, イエシエー（2001）『チベット医学：身体のとらえ方と診断・治療』（三浦順子訳）地湧社。

- 富山稔（2020）『青いケシ メコノプシス（原種の花たち 2）』文一総合出版。
- 仲間裕子（2016）「『イメージ人類学』から『フィレンツェとバグダット』へ」『立命館言語文化研究』27(4), 1-10 頁。
- 中山理（2003）『イギリス庭園の文化史：夢の楽園と癒しの庭園』大修館書店。
- 長岡慶（2021）『病いと薬のコスモロジー：ヒマラヤ東部タウンにおけるチベット医学、憑依、妖術の民族誌』春風社。
- 藤本龍児（2007）「アメリカにおける個人主義とニューエイジ運動：現代宗教の問題と課題」『現代社会学理論研究』1, 114-130 頁。
- ブラッドリー, タムディン・シザー（2003）『癒しの医療 チベット医学：考え方と治し方』（井村宏次監訳・山元謙一訳）ピーニングネットプレス。
- ブランド, ウィルフリッド（2014）『植物図譜の歴史：ボタニカル・アート 芸術と科学の出会い』（森村謙一訳）八坂書房。
- ベルティンク, ハンス（2014）『イメージ人類学』（仲間裕子訳）平凡社。
- 前川修（2016）「写真イメージの人類学：ベルティンクの写真論」『立命館言語文化研究』27(4), 37-48 頁。
- 宮前保子（1999）「ガートルード・ジーキルの自然観とコテッジガーデン」『ランドスケープ研究』63 巻 5 号, 403-408 頁。
- 箭内匡（2018）『イメージの人類学』せりか書房。
- ラック, アンドリュウ（2022）『ポピーの文化誌』（上原ゆうこ訳）原書房。
- ワングェル, ロプサン（1995）『ダライ・ラマ十四世の主治医が語る心とからだの書』（中川和也解説）法研。

- Adams, V., M. Schrempf, and S. R. Craig, eds. 2010. *Medicine between Science and Religion: Explorations on Tibetan Grounds*. New York; Oxford: Berghahn Books.
- Adams, V., M. Schrempf, and S. R. Craig. 2010. Introduction: Medicine in Translation between Science and Religion. In V. Adams, M. Schrempf, and S. R. Craig, eds. *Medicine between Science and Religion: Explorations on Tibetan Grounds*. New York, Oxford: Berghahn Books, 1-28.
- Blaikie, Calum. 2013. Currents of Tradition in Sowa Rigpa Pharmacy. *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 7(3), 425-451.
- . 2015. Wish-Fulfilling Jewel Pills: Tibetan Medicines from Exclusivity to Ubiquity. *Anthropology & Medicine*, 22(1), 7-22.
- Bradley, T. S. 2000. *Principles of Tibetan Medicine*. London: Thorsons.
- Clifford, Terry. 1984. *Tibetan Buddhist Medicine and Psychiatry: The Diamond Healing*. Wellingborough: The Aquarian Press.
- Craig, S. R. and Barbara Gerke. 2016. Naming and Forgetting: Sowa Rigpa and the Territory of Asian Medical Systems. *Medicine Anthropology Theory*, 3(2), 87-122.
- Dekhang, T. D. 2008. *A Handbook of Tibetan Medicinal Plants*. Dharamsala, India: Tibetan Medical & Astrological Institute (Men-Tsee-Khang).
- Donden (Dhonden), Yeshi. 1986. *Health Through Balance: An Introduction to Tibetan Medicine*. Translated by Jeffrey Hopkins. Ithaca, New York: Snow Lion Publications.
- . 2000. *Healing from the Source: The Science and Lore of Tibetan Medicine*. Translated by B. Alan Wallace. Ithaca, New York: Snow Lion Publications.
- Drungtso, T. T. and T. D. Drungtso. 2005. *Tibetan-English Dictionary of Tibetan Medicine and Astrology (Revised and Enlarged Edition)*. Dharamsala, India: Drungtso Publication.
- Dummer, Tom. 1988. *Tibetan Medicine and Other Holistic Health Care System*. London; New York: Routledge.
- Gaines, A. D. and R. A. Hahn. 1982. Physicians of Western Medicine: Five Cultural Studies [Special Issue]. *Culture, Medicine and Psychiatry*, 6(3), 215-384.
- . 1985. Among the Physicians: Encounter, Exchange and Transformation. In R. A. Hahn and A. D. Gaines, eds. *Physicians of Western Medicine: Anthropological Approaches to Theory and Practice*. Dordrecht; Boston: D. Reidel Publishing Company, 3-22.
- Gaines, A. D. and Robbie Davis-Floyd. 2003. Biomedicine. In C. R. Ember and M. Ember, eds. *Encyclopedia of Medical Anthropology: Health and Illness in the World's Cultures*. New York: Springer, 95-109.
- Gell, Alfred. 1992. The Enchantment of Technology and the Technology of Enchantment. In J. Coote and A.

- Shelton, eds. *Anthropology, Arts, and Aesthetics*. Oxford: Clarendon Press, 40-63.
- Gerke, Barbara. 2011. Correlating Biomedical and Tibetan Medical Terms in *Amchi* Medical Practice. In V. Adams, M. Schrempf, and S. R. Craig, eds. *Medicine between Science and Religion: Explorations on Tibetan Grounds*. New York: Berghahn Books, 127-152.
- . 2019. Material Presentations and Cultural Drug Translations of Contemporary Tibetan Precious Pills. In W. A. McGrath, ed. *Knowledge and Context in Tibetan Medicine*. Brill's Tibetan Studies Library, Vol. 43. Leiden; Boston: Brill, 337-367.
- Grey-Wilson, Christopher. 1993. *Poppies: The Poppy Family in the Wild and in Cultivation*. Portland, Oregon: Timber Press.
- . 2015. *The Genus Meconopsis: Blue Poppies and Their Relatives*. London: Royal Botanic Gardens, Kew.
- Gyatso, Thinley and Chris Hakim. 2010. *Essentials of Tibetan Traditional Medicine*. Berkeley, California: North Atlantic Books.
- Heelas, Paul. 1992. The Sacralization of the Self and New Age Capitalism. In N. Abercrombie and A. Warde, eds. *Social Change in Contemporary Britain*. Cambridge: Polity Press, 139-166.
- . 1996. *The New Age Movement: The Celebration of the Self and the Sacralization of Modernity*. Oxford; Cambridge: Blackwell.
- Hofer, Theresia. 2018. Foundations of Pharmacology and the Compounding of Tibetan Medicines. In T. Hofer, ed. *Bodies in Balance: The Art of Tibetan Medicine*. Seattle: University of Washington Press, 46-63.
- Jekyll, Gertrude. 1995 [1908]. *Colour in the Flower Garden*. Portland, Oregon: Sagapress/Timber Press.
- Kalsang, Tsultrim. 2016. *Cultivation and Conservation of Endangered Medicinal Plants: Tibetan Medicinal Plants for Health*. Dharamsala, India: Men-Tsee-Khang.
- Klieger, P. C. 1992. *Tibetan Nationalism: The Role of Patronage in the Accomplishment of National Identity*. Meerut, India: Archana Publications.
- Kloos, Stephan. 2017. The Pharmaceutical Assemblage: Rethinking Sowa Rigpa and the Herbal Pharmaceutical Industry in Asia. *Current Anthropology*, 58(6), 693-717.
- Norbu, Tering. 2015. *Encyclopedia of Myriad Herbs: Medicinal Herbs in Tibetan Medical Tradition*. Dharamsala, India: Men-Tsee-Khang.
- Planning Commission, CTA. 2010. *Demographic Survey of Tibetans in Exile, 2009*. Dharamsala, India: Planning Council, Central Tibetan Administration (CTA).
- Pordié, Laurent, ed. 2008. *Tibetan Medicine in the Contemporary World: Global Politics of Medical Knowledge and Practice*. London: Routledge.
- Robinson, William. 1977 [1894]. *The Wild Garden: Or the Naturalization and Natural Grouping of Hardy Exotic Plants with a Chapter on the Garden of British Wild Flowers*. London: Scholar Press.
- Sabernig, Katharina. 2019. Visceral Anatomy as Depicted in Tibetan Medicine. In William A. McGrath, ed. *Knowledge and Context in Tibetan Medicine*. Brill's Tibetan studies library. Vol. 43. Leiden; Boston: Brill, 111-139.
- Saxer, Martin. 2013. *Manufacturing Tibetan Medicine: The Creation of an Industry and the Moral Economy of Tibetanness*. New York: Berghahn Books.
- Schrempf, Mona, ed. 2007. *Soundings in Tibetan Medicine: Anthropological and Historical Perspectives*. Proceedings of the Tenth Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Oxford, 2003. Leiden; Boston: Brill.
- Tsing, Anna. 2015. *The Mushroom at the End of the World. On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Williamson, Laila and Serinity Young. 2009. *Body and Spirit: Tibetan Medical Paintings*. New York: American Museum of Natural History in association with University of Washington Press.